

ラフカディオ・ハーンにおける東西の結婚と倫理

大東, 俊一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

103

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

72

(発行年 / Year)

1998-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004786>

ラフカディオ・ハーンにおける東西の結婚と倫理

大 東 俊 一

一、放浪と結婚

ラフカディオ・ハーンは一八五〇年六月二十七日、ギリシヤのイオニア諸島の一つであるレフカス島で生まれた。その島は当時イギリスの保護下であり、駐屯していたイギリス軍の軍医チャールズ・ブッシュ・ハーンと、島の旧家出身のローザ・アントニオ・カシマチが両親であった。二人は周囲の反対を押し切って結婚したが、幸せは長続きはしなかった。母親は二歳になったハーンを連れて、アイルランドのダブリンにある夫の実家に身を寄せることになるが、言葉も満足に通じず、生活習慣や宗教までも異なった土地で、ノイローゼに近い状態になってしまう。その上、自分を支えてくれるはずの夫チャールズは外国に駐留していて、ほとんど不在であった。

ハーンが四歳の時、母親は出産のためにひとりでギリシヤへ里帰りをしたので、これ以後、ハーンは大叔母のサラ・ブレナンに預けられることになる。しかし、ローザの留守中に、クリミア戦争から無事帰還したチャールズは、ローザとの結婚を無効であると宣言し、今は未亡人となっていた昔の恋人と再婚してしまったのである。この後ハーンは母親と二度と会うことはなかった。チャールズは自らの妻と子供を捨てたのである。ハーンが六歳の時のことであった。

ハーンの養育にあたった大叔母のサラ・ブレナンは子供のいない裕福な未亡人であり、ハーンに財産を相続させて、家を継がせようとしていたらしい。彼女は英国国教徒の多い一族の中で、結婚を機にカトリックへと改宗した人で、ハーンに厳格な宗教教育を施した。十三歳になったハーンは、イギリス中部のダラム近郊にあるカトリック系の名門男子校、聖カスバート校に入学する。しかし、資金援助をしていた遠縁の男性が事業に失敗するに及んで、大叔母は家屋敷まで失って、ハーンの学費も払えなくなってしまった。このため十七歳になっていたハーンは退学を余儀なくされたが、もはや帰る所はない。その後の一年半ほどのハーンの足跡ははっきりとはわからないが、ロンドンの下層社会でみじめな生活を送ったようである。

その後、舞台はアメリカへと移る。一八六九年、単身アメリカに渡ったハーンは、オハイオ州シンシナティに身を落ち着け、さまざまな職を転々としたあと、地元の日刊新聞「シンシナティ・インクワイヤラー」紙の記者となり、これ以後文筆を生活の基盤とするようになる。しかし、アメリカ渡航はハーンの放浪の始まりでもあった。一八七七年にはルイジアナ州ニューオーリンズに移るが、その後一八八七年から二年ほどを西インド諸島のマルティニーク島で過ごしたあと、一八九〇年に日本に渡ってからは十四年の間に、松江、熊本、神戸、東京と転々と居を移していった。

さて、ハーンは一八九六年に日本に帰化するまでは英国国民であったが、以上のような出自、来歴を見るかぎり、一義的に帰属が定まらないという印象はぬぐえない。ただ、ハーンの放浪の人生の中で、彼を一つの土地、一つの文化に落ち着かせようとする力が働いたとするならば、それは結婚という事態ではなかっただろうか。ハーンは生涯の中で、二度結婚と呼べるものを経験した。一回目はシンシナティの地で、二回目は松江の地においてである。一回目の結婚は完全に失敗であった。相手はハーンの下宿先の料理人で、黒人との混血であるマティ・フォウリという二十一歳の女性だった。ほぼ二年越しの恋愛関係を正式なものとするために、ハーンは結婚を決意した。しかし、当時の社会では白人が黒人と結婚することはタブーであった。その上、当時のオハイオ州の法律には、一八六一年から一八七七年の間ではあるが、白人と黒人の結婚を禁止する条項が存在していたのである。結婚式は一八

七四年六月十四日に行われたと思われるが、ハーンは州法を犯したのである。これ以後、友人や周囲との関係は悪化していき、翌年の夏にはハーンは新聞記者の職も失ってしまった。さらに耐え難いのは当のマティとの関係である。マティの方が一方的に悪いというわけではないが、ハーンはマティの行状にだんだん苦しみようになっていた。そして、二人の仲は一八七七年には決定的な破局を迎え、ハーンはシンシナティをあとにして、ニューオーリンズへと向かうのである。以後、二人は二度と会うことはなかった。

二回目の結婚に至る概要は次の通りである。

一八九〇年四月に横浜に到着したハーンは、B・H・チェンバレンらの斡旋によって、その年の九月から松江尋常中学校の英語教師となった。ハーンと小泉セツとの結婚の時期や経緯に関しては、これまでさまざまな説が出されてきたが、現在では、二人の出会いは一八九一年一月末か二月初め頃、独り身で不自由しているハーンのもとへセツが身の回りの世話役として赴いた時であるとされている²⁾。最初は言葉も満足に通じないような二人ではあったが、次第に尊敬の念と愛情が育まれていったのであろう。六月になって北堀町の根岸邸（現在は小泉八雲旧居として保存）に移る頃には、二人の同棲関係は結婚という公の関係へと向かうまでに成熟していたものと思われる。そして、七月下旬から八月上旬の間に、内輪だけの結婚披露が行われた模様である。ハーンは八月に友人のページ・M・ベイカーに宛てた手紙の中で次のように述べている。

もちろん妻の写真はお送り致します。申し上げなければならぬことは、日本の法律上の問題があるために、ただ今のところは、ただ日本風に結婚しているということですが。私は日本国民になろうと思っているのですが、そうすることによってしかこの問題はうまく片付かないのです。現在の法制度のもとでは、英国の法律に則って土地の女性と結婚すると、その女性は英国国民となり、もし子供がいれば、その子供も英国国民になってしまいます。そういうわけですから、その女性は外国人に対する日本の法律に従って、外国人居留地内で暮らさなければならず、ほとんど同胞からは隔離されてしまいます。それですから、私が法律上日本人とならない

ちに彼女と結婚するといったことは、彼女にとっては破滅ともなるでありましょう。といいますが、もし私
が死ぬようなことがあれば、国民としての権利を失くしたことを大いに後悔することになるであろうからであ
ります。³⁾

「日本風に結婚している」とは法律上の届け出をしていない夫婦関係、即ち、内縁を指す。周囲の人々には夫婦
と認めてもらえても、法律上ははまだ夫婦ではない。このままでいくと、当時の法律では、ハーンの財産は死後セ
ツの手には渡らず、イギリスにいる見ず知らずの遠縁のものとなってしまふ。一方、セツを英国国籍に移したと
しても、文面にもあるように、著しい不利益を被る可能性がある。こういった事態を避けるためには、ハーンが小泉
家に入籍することによって日本に帰化するほかなかったが、チェンバレンをはじめとして、英米人の友人たちの多
くはそれには反対であった。

しかし、友人たちの反対にもかかわらず、ハーンが帰化を決心した大きな理由の一つは、一八九三年十一月の長
男一雄の誕生であったと思われる。友人のE・ヘンドリック宛の同月付の手紙の中で、ハーンは、「自分の子供を
産んでくれた女性に対して残酷な態度をとる男もいるのだということを考えるとき驚くほかに、しばらくの間、世
の中が真つ暗に思えました」と述べているが、ローザと自分を捨てた父チャールズのこと念頭にあったであろう
ことは想像に難くない。なにぶん前例のないことでもあり、帰化の手続きには時間を要したが、二人の結婚は一八
九六年一月十五日願済二月十日付で、ハーンが小泉八雲として小泉家に入籍することによって、法的にも完全なも
のとなった。

さて、その後のハーンの結婚生活については後述するとして、失敗に終わった一回目の結婚（法的には白人と黒
人との結婚は認められていなかったから、実際には同棲であるが）と違って、二回目の場合、同棲ないし内縁といっ
た関係から法律上の結婚・帰化へとハーンが進んでいったのは、自分の死後、確実に財産が妻子の手に渡るように
するためであろうことは想像に難くないが、ハーンを意識に則してみると、また別の側面も存在していたように思

われる。それは端的に言えば、ハーンが心に描いている理想的な家族・家庭像といったものと関係している。ハーンがセツと結婚するまでは家庭の暖かさを知らなかったことは言うまでもないが、それどころか彼の放浪の人生を考えると、特定の社会・文化に定位した確とした家族観・家庭観を持ちえたかどうかすら疑わしい。西洋の社会において嫌というほど辛酸をなめたハーンにとって、そういった社会を支える諸原理は呪うべきものではあったが、すべての原理が忌避すべきものというわけでもなかったであろう。一方、日本風のハーンであったが、日本のすべてを好んだわけでもない。そこにはおのずとハーン自身の選択が働いているわけであり、家族観・家庭観といったものに関して事情は同じであろう。そして、家族・家庭というものがひとつの社会制度であることを思えば、家族観・家庭観はそれが依って立つ社会を支えている諸原理を反映していることは言を俟たないであろう。

ハーンの家族観・家庭観がかなり折衷的なものであろうことは予想されるが、以下において、東西の文明、社会に対するハーンの状態を検討することから始めて、ハーンにおける結婚の意味を考えていくことにしよう。

二、西欧の原理と日本の道徳

ハーンがキリスト教をはじめとした西欧文明嫌いであることはつとに有名である。一方、ハーンが来日後最初に赴任した松江の町には古くからの文物や習俗が色濃く残っており、西欧文明に毒されていない様子がハーンを魅了したようである。松江滞在中の一八九一年五月二十二日付のチェンバレン宛の手紙の中で、ハーンは次のように述べている。

西欧文明から逃れて日本の生活の中に入るのは、十気圧の空気から逃れて完全に正常な環境に入るようなものです。さらに告白しなければならぬことは、西洋の本質的な特徴である個人主義 (the Individuality) がまさに欠けているということが、私にとっては日本の社会生活の魅力のひとつであるということです。とい

うのは、この日本では、誰ひとりとして他人を犠牲にして自らの個性を實現しようとする者はいないからです。

ハーンは西歐文明の本質を個人主義と見なす。ハーンにとっては、個人主義とか個性といったものは自分がかつて西歐社会で経験した悲惨な生活の原因を成すものであり、他人を顧みず自己の欲望を拡張していく利己主義と同じものであっただろう。さらに、そういった個人主義は、ハーンの道德観からすると、自分を含めた限られた人間だけを競争の落伍者とするから悪いのではなく、人類全体の發展に照らして悪いのである。ハーンは最初の日本論である『知られざる日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan)の序文の中で、日本人の生活のたぐいまれな美しさは国民的な美德を代表している一般大衆の生活の中にあるとした上で、こういった生活を見ると、「我々のうぬぼれている西歐文明の進みゆく道が本当に道德的向上 (Moral Development) の方向へ向かっているかどうか疑わしく思われる」と述べている。つまり、全人類の視野から見ても、個人主義をその本質とする西歐文明は、「道德的向上」に資するかどうか疑わしいのである。

松江時代のハーンはほぼ手放して日本をほめたたえているが、時が経つにつれてハーンの批難の矛先は、西歐文明を受け入れつつある新しい日本へも向けられていく。とりわけ次の赴任地である熊本での生活が、ハーンに新しい日本への憎悪を駆り立てたようである。奉職した第五高等中学校での不快な体験については詳述しないとして、そもそも熊本という町がハーンには気に入らなかった。熊本は一八七七年の西南戦争で灰燼に帰し、ハーンが赴任した一八九一年当時は近代都市建設へ向けての努力の真っ最中であつた。ハーンにとって町自体が殺風景で、興味を引かれる神社仏閣や古い風俗習慣も少なかった。

……私は言いようのない嫌悪感をもって、新日本の露骨な利己主義、何事にも平気な虚栄心、浅薄で野卑な懷疑主義、そして、天保時代について侮辱の言葉をしゃべり散らし、明治以前のいにしえのいとしい人々を馬鹿にする新日本、干からびたレモンのように空虚で苦い心を持って、決して微笑むことのない新日本を嫌悪す

るのであります。(一八九三年一月十七日付、チェンバレン宛書簡)

新日本に対するハーンの憎悪は、結局は西歐の物質文明に対する憎悪と同じものである。ハーンにとって西歐文明を取り入れる日本は、もはや彼の思い描いてきた日本ではないのである。節子夫人による『思い出の記』の中で、「私の小泉八雲、日本人よりも本当の日本を愛するです」と語るハーンの様子が伝えられているが、ハーンの考えでは「本当の日本」は当時の日本においても急速にユートピアと化しつつあったのである。ハーンは一八九二年の夏休みに隠岐を訪れ、西歐文明に毒されていないところが大いに気に入る、三週間ほど滞在したが、隠岐はまさにハーンにとってはユートピアであったのかもしれない。自らの思い描く旧日本のイメージについて、松江時代の同僚であった西田千太郎にハーンは次のように語っている。

私は小さな町が好きです。多度津、隠岐の菱浦、石見の温泉津、中海の大根島のような所に住むことができれば、私の心は喜びで満たされるでしょう。……私の思うところ、あらゆる良いもの、高貴なもの、真実なもの、は旧日本でした。永久に明治時代から飛び去り、時の流れを遡って、天保時代へ、また、千百年前の雄略天皇の時代へ行けたらいいと思います。昔の扇子、昔の屏風、小さな村の生活、それが私の愛する本当の日本なのです。(一八九三年十一月付書簡)

後年、ハーンは隠岐には家を建てて住みたいとまで言っているが、このような旧日本に対するハーンの愛惜の念を、単なる懐古趣味であると断じるのは早計であろう。ハーンは西歐文明が人類の「道徳的向上」に資するかどうか疑わしいと考えたが、ここでも問題は道徳なのである。西歐文明を支える本質的原理を個人主義と見なすハーンは、旧日本の社会や文化を支える諸原理についても考察をめぐらせている。

『東の国から』(Out of the East) に収められた「柔術」という作品の中で、ハーンは東西の社会の諸原理を検討

し、新日本の進路について論じる。その最後の箇所で、ハーンと学生との対話という形をとって、旧日本の道徳が問題にされている。そこでハーンが旧日本を代表する徳性と見なしているのは、「親切、礼節、英雄的精神、自愛心、献身、親孝行、信義、そして、少しばかりのもので満足する能力など」である。これらの徳性を仮に旧道徳と名付けておくとすれば、ハーンが旧日本を愛するのは、旧日本の社会や文化が旧道徳といったものによって支えられているからである。次の言葉は学生の口を借りて語らせてはいるが、ハーンの東西社会の原理に関する考え方を集約的に表すものであろう。

日本の古い社会は、個我 (the individual) というものを犠牲にして、先生がお褒めになるような没我とか、礼節とか、慈悲の心といった徳性を培いました。ところが、西洋の社会はとりわけ思考力と行動力の競争という無制限の競争の中で、個我を培っています。

没我、礼節、慈悲の心といった旧道徳の徳目の挙げ方は、多少体系性を欠いている観もあるが、今は問わないことにしよう。ハーンにとって、東西の対立は西欧文明の本質である個人主義と旧日本を代表する旧道徳との対立という倫理の問題に帰着する。そして、ハーンの目はそういった旧道徳を醸成しているより根源的なもの、即ち、祖先崇拜というものに向けられていく。

三、祖先崇拜と家族

『日本——一つの試論——』(Japan — An Attempt at Interpretation) はハーンの研究の集大成とでもいえるべき作品であり、日本人の生活、日本の社会基盤といったものを内側から捉えようとした意欲作である。その中でハーンは、古代から今日に至るまで日本社会の基盤となっているのは祖先崇拜という一種の宗教であり、その基本

的概念は、「生きてゐる者の福祉繁栄が死者の幸福にかかつてゐる」という考え方であると説明している。即ち、こういった考え方を根底にして、古代以来の家族組織、財産と相続に関する法律等など、要するに古代以来の日本社会全体の機構が発達してきたとハーンは言う。ハーンは進化論的考え方に則つて、祖先崇拜に段階的に三つの形式を認める。家族の祖先の霊を崇拜する家庭の祭、氏族・部族の統率者の霊を崇拜する地域社会の祭、そして、国の支配者の霊を崇拜する国家の祭といった祖先崇拜の三つの形式は、後のものが前のものに取つて代わることなく最終的には三つのものが併存しているとハーンは考えている。

これら三つの段階のうちで、倫理の基本は家族における祖先崇拜である。ハーンによれば、祖先崇拜からは孝道 (filial piety) を重んずる風潮が生じるが、ハーンの言う孝道は単に子供が親に対して持つ尊敬の念といった通常の意味のものではない。それはむしろ、死者に対する尊敬の念と同時に、生きてゐる者に対する義務の情といった家族の各々の構成員が持つべき義務感に近いものである。祖先の霊を手厚く祀ることをはじめとして、親に対する子供の義務、嫁・婿・養子・養女などが家長に対して持つ義務、また、使用人が主人に対して持つ義務など、家を維持していくために必要な義務がそこには含まれている。

日本の倫理の全体系が宗教に起源を持つてゐることは確かである。そういった宗教のおかげで、死者および生者に対するすべての義務の観念——尊敬の念、忠誠心、献身の精神、そして、愛国心——がうまれてきているのである。(「家庭の宗教」)

ハーンの見るところ、日本の倫理の基本は家族における祖先崇拜であり、そこから国家全体へと倫理の網の目が広がっていくわけであるが、そういった祖先崇拜は家族をひとつの宗教的共同体とし、家族相互を愛情ではなく宗教という第一義的な絆によって結びつけているものとハーンの目には映る。一家の繁栄は祖先の祭を確実に行うことにあり、最大の不幸は先祖の供養をする跡取りがいなくなることである。嫡男が死んだ場合には養子を取つたり、

娘ばかりの場合には、婿を迎えて、先祖の祭を維持していかなければならない。祖先を祀り、家を維持していくことが、家長ひいては家族全体の義務であり、その目的のためには家長でさえ恣意的な行動は制限される。

さて、旧日本を支える旧道徳といったものに好意を寄せるハーンにとって、祖先崇拜を基盤として成り立っている家父長制度下の家族形態は好ましいものと映ったであろうことは想像に難くない。しかし、ハーンはそれに対して全面的に賛意を表したわけではない。夫婦間の愛情という問題にハーンの目は注がれる。家長を頂点とし、年少者が年長者に従い、女性が男性に従うといった家族制度の下では、結婚は孝道の主要な義務である。即ち、結婚は祖先崇拜という宗教的行為を行うための一環である。

それに対して個人主義を原理とする西欧のキリスト教社会では夫婦関係が重視されており、こういった東西社会の基本原理の違い、人間観の違いというものに、ハーンは来日後のかなり早い時期から気づいていたようである。そのことは聖書の「創世記」第二章第二十四節、「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」という箇所をめぐっていくつかの記述から窺うことができる。

ハーンの来日後の第一作となった『知られざる日本の面影』の中の「英語教師の日記から」では、「創世記」の章句は引用されていないが、生徒に書かせた英作文や教室での問答に託して東西の違いが述べられている。「私達がとても奇妙だと思ふのは、ヨーロッパでは妻が両親よりも夫を愛するということです。日本では、両親よりも夫を愛する妻などひとりもいません」という生徒の英作文が引用されたり、ハーンと生徒との次のようなやりとりが紹介されている。

「ヨーロッパの人は自分の父親や母親よりも妻のことを愛するのですか。」

「いつもそうだというわけではないが、一般的にはそうだろうね。」

「でも、先生、ぼくたちの考え方からすると、それはとても不道徳なことです。」

また、ハーンは『東の国から』に収められた「九州の学生とともに」において、とりわけ愛情と道徳の問題をめぐって、西欧の小説の理解に困難をきたしている学生の様子を描いているが、同じ書の中の「永遠の女性」には、「創世記」の先の章句を引用し、東西の結婚観と倫理観の違いについて述べている箇所がある。

孝道が道徳的絆になっていない社会、子供たちが自分の家庭を作るために両親のもとを離れていく社会、両親よりも妻や子供を愛することが自然であるばかりでなく正当でもあると考えられている社会、親の意志とは無関係に、若者同士の合意によって結婚が行なわれる社会、姑が嫁から従順な奉仕を受ける権利を持たない社会——こういう社会は日本人の学生にとっては、必ず空飛ぶ鳥や野原の獣の生活状態とほとんど変わるところのないものであり、また、せいぜいよく言っても、一種の道徳的な無秩序状態と思えるのである。

また、これに続く箇所ではハーンは、「日本の若者にとって、結婚は簡單明瞭な自然な義務みたいなものと考えられている」とも述べているが、旧日本の道徳に好意を寄せるハーンとはいえ、夫婦間の愛情という問題についてはどのように考えていたのだろうか。

もちろんハーンは家父長制度下の夫婦間に愛情が存在しないなどと言ってははいない。『日本——一つの試論』の「日本の家族」という章では、結婚は愛情の問題ではなく宗教上の義務の問題であり、「愛情はそうした夫婦関係の中から生まれるであろうし、また、当然生まれるべきであった」と述べている。ただ、家族の団結を乱すような激しい愛情は禁物で、夫婦の愛情には自ずと限度があることをハーンは認めている。先のマティ・フォウリとの結婚において、一時的であるとはいえハーンが見せた情熱からすると、旧日本の夫婦間の愛情のあり方に何かしっくりしないものをハーンが感じたとしても、あながち不思議ではないだろう。次に、ハーンの作品や実生活の中に夫婦愛の問題をさぐってみることにしよう。

四、夫婦愛

ハーンの再話作品の中には、夫婦愛がテーマと思われるものがいくつかある。その中で『怪談』に収められた「おしどり」は最も広く読まれたもののひとつであり、鮮烈な読後感を与えるものである。狐師に雌鳥を殺された雌鳥が、狐師の目の前で自ら嘴で腹を突いて自害して抗議をするというものであるが、原話は『古今著聞集』巻二十にある。原話とハーンによる再話との大きな違いは雌鳥の行動である。原話では雌鳥を殺した狐師の夢に、美しい女性となって現れた雌鳥は、雄鳥のいない寂しさを涙ながらに訴えて消え去る。一方、再話では、雌鳥は何の罪もない雌鳥を殺したことで、激しい調子で狐師に詰め寄る。また、この話のクライマックスでも言うべき雌鳥の自害の場面では、原話の方では狐師が雄鳥のかたわらで自害している雌鳥を見つけたとしているだけであるのに対して、再話では、狐師が夢を見た翌日、雌鳥を殺した沼に行ってみると、雌鳥が狐師めがけて泳いで来て、じっと狐師を見据えたあとで、腹を嘴で引き裂くといった具合である。原話の雌鳥は、不幸に見舞われても相手の非を激しく責めたりはしないで、自らの悲しみを心の奥底に留めておこうとする旧日本の女性の典型であるように見える。それに対して、再話に描かれた雌鳥は、一見すると自己主張の強い西欧風の女性のようであり、ハーンの好む旧日本の女性像とはほど遠い印象を受ける。ハーンがアメリカの読者を想定し、彼らに受け入れられやすいように雌鳥を西欧風に仕立て上げたという指摘もあるが、この「おしどり」にはハーンの理想とする夫婦愛、それも西欧的な夫婦愛が象徴的に描かれていると考えられないであろうか。この話の要諦はやはり雌鳥の死に殉じて雌鳥が自らの命を断つという点にあることに注意したい。こういう事態そのものはいぜんとして日本の旧道徳下における死にまつわる徳目に通じるものであり、西欧の読者に伝えるべき異国風の出来事として、変更を加えることができない事態である。その一方で、雌鳥の自害といった出来事は西欧的な確固とした個性の存在をアメリカの読者に印象づけるのに十分である。その意味において、この話は、夫婦愛をめぐる強烈な個性のドラマであると言ってもよい。ハーン

ンにとって夫婦愛は、夫と妻という一個の人間同士の間には芽生えるものであって、雌鳥に関する西歐的な脚色は、読者に対する配慮とは無関係に、そういったハーン自身の考え方から出たものと考えてもよさそうである。ハーンは、こと夫婦愛というものに関しては、旧日本の家族共同体という場の中の夫婦愛といったものよりも、むしろ西歐的な、個人対個人の結びつきに則した夫婦愛をよしとしたと言ってもよいかもしれない。

考えてみれば、夫婦像を描くハーンの内いくつかの作品には、旧日本の時代の物語でありながら、家族共同体という場の中で夫婦の問題を扱ったものは見受けられない。ハーンは描く夫婦は、むしろ家族という状況から切り離され、一個の人間として対面している。

『明暗』(Shadowings) に収められた「和解」という作品も、そうした夫婦を描いたものである。主家が没落して貧窮にあえぐ身となった若い侍が、遠くに職を得て都を去ることになった。侍は妻を離縁し、出世の手筈もあろうかと思つて、家柄のよい女と結婚して赴任した。男は時が経つにつれて前の妻が恋しくなり、後妻と別れて都の先妻のもとへ帰つて来た。ふたりはそれまでの出来事を存分に語り合い、床に就いたが、朝になって目が醒めると、男は骸骨となった妻の傍らで寝ていたという話である。

原話は『今昔物語』にあるが、ハーンの話は筋はほぼ同じであるとはいへ、男女の人物像に関して重大な加筆がなされている。

まず、男の人物像について言えば、原話では最初の妻を離縁したことに関する後悔の念といったものは全く描かれていない。時が経つにつれて前妻のことが恋しくなり、無性に会いたくなつたという具合である。一方、再話では、貧乏ゆえに前妻と別れ、出世のためと思つて新しい妻を娶つたという事情は同じであるが、そのことに對する男の後悔の念が延々と描かれ、女に會つて過去の行状を詫びるといふ筋立てになつてゐる。また、二度目の妻との離婚に關しても、性格がけわしく利己的であつたとか、子供がなかつたとかいふ男の側からの理由をはつきりと示し、男の心のなりゆくさまをくつきりと描いてゐる。

また、女の人物像に關しても、原話では美人で氣立てもよいといった程度で、それ以上の踏み込んだ描写はない。

一方、再話では、男の目に映る女は、「優しいもの言い、にこやかな顔つき、上品で可愛い立ち居振る舞い、非の打ちどころのない辛抱強さ」といった旧日本の女性の美德を体現したものとなっている。そして、男が過去の過ちを詫びたあと、女が男に対して、自分はもともと妻としてはふさわしくなかったのに親切にしてくれたこと、貧乏ゆえの離縁であったのだから許しを乞うにあたらないことなどを述べる箇所でも、恨みがましい言葉など全くなく、純粹な心情の持ち主として描かれている。ハーンは常々日本女性を褒め称え、「日本女性ほど麗しい性格の持ち主はありません。日本民族の持っている隠れた良さはすべて女性の中に集中的に存在していると思います」（チェンバレン宛書簡、一八九一年、松江）とも述べているが、この女の人物像はハーンの考える理想的な日本女性にこの上なく近いものではないだろうか。ただ、原話と比較して、再話で女の描写に關して加筆が著しいのは、男が謝罪したあとでの女の受け答えの言葉であることを思えば、自分の気持ちをすべて言葉としてきちんと相手に伝えるという態度が窺える。こういった態度は、言うまでもなく、個というものが確立された西欧社会において、個と個を結びつける絆として不可欠なものであり、こうしてみるとハーンの理想的な女性は、旧日本の美德を体現した女性に限りなく近いとはいえ、一方では西欧的な自我といったものを兼ね備えた女性ではないかと思えてくる。

前述の若い侍についても、再話における加筆の大部分が後悔の情や謝罪の言葉といった男の人格に關する描写であることを考えると、事情は同じであるように思われる。この「和解」にあつては男はもちろんのこと、女さえもが個としての輪郭が明瞭に描かれ、互いに一個の人間として対面しているように見受けられる。

さて、「和解」や「おしどり」に關してもそうであるが、夫婦愛をテーマにしたハーン作品には、家族の他の構成員との葛藤などはほとんど描かれることはなく、夫婦間の純愛物語といった様相を呈している。『怪談』に収められた「青柳の話」なども、女の両親が登場するものの、物語の進行における点景ほどの役割しか果たしていない。話の中心は柳の精である青柳という美しい女性に対する若侍の純粹な愛慕の情である。能登の国から京へ上る途中、一夜の宿を借りた農家の美しい娘（青柳）に一目惚れした若侍・友忠が、娘を連れて京に上るが、時の権力

者である細川政元に知れて、娘は政元の屋敷に連れ去られてしまう。友忠はお咎めを覚悟で娘に文を送るが、その文も政元の手落ち、政元の御前に友忠は呼び出されることになる。死を覚悟していた友忠だったが、文を読んだ細川公は青柳を想う友忠の心情に感動し、友忠を赦してその場で婚礼を挙げさせた。そして、ふたりして一緒に暮らした五年後のある朝、青柳は自分が柳の精であることを告白して、苦痛の叫びを発して消えてしまう。柳の木が切り倒されたのである。

こうした青柳に対する友忠の愛慕の情は、『天の川綺譚』(The Romance of the Milky Way) に収められた「伊藤則資の話」における、平家の美しい姫君の亡霊に対する則資の愛慕の情に比肩するものであり、ハーンは夫婦愛の基盤としてお互いを結びつける強い精神的な絆の存在を重視していたことがわかる。このことは先の「おしどり」や「和解」に関しても同様であり、ハーンの考える夫婦愛は、結婚という社会制度の中で育まれた恋愛感情といったものに基づくものと言ってもよいだろう。ハーンの夫婦観は夫と妻とが一個の人間として対峙し、個と個との絆を重視した、むしろ西欧的なものだったのである。

五、理想的な家族

これまでのところで、夫婦や家族といったものに対するハーンの見え方が大体明らかになったと思われるが、それに照らしてハーンの現実の家庭生活を見てみることにしよう。

ハーンは松江時代に小泉セツと同棲生活を始めるが、熊本に移ると経済的なゆとりが生じたこともあって、セツの養父母と養祖父、そして奉公人たちも加わって、十一人の大世帯となった。ハーンは初めて経験する家庭生活について次のような感想を友人に書き送っている。

私は家族では十一人の小世界を持っています。この小世界の人達にとって私は愛であり、光明であり、また、

命の糧なのです。それは実に平穩な世界です。私が幸せなときは、皆も幸せなのです。私が少しでも疲れた様子を見せれば、皆は物音ひとつ立てず、忍び足で歩きます。家族は一種の道徳的な支えです。(ヘンドリック宛、一八九三年、熊本)

日本に来るまでの放浪生活とは違い、しっかりと現実と根差した生活に、ハーンは喜びを感じている。これ以後、東京で没するまでの間、外部との摩擦に耐え兼ねて、時折放浪志向を友人に漏らすことはあっても、ハーンは家族という小世界を大切に守った。日本での家庭生活は総じて幸せなものであったようだ。

日常生活の様子をチェンバレンに伝えた手紙があるが、ハーンの一日の様子を拾いあげてみよう。

午前六時——小さな目覚まし時計が鳴る。妻が起きて、昔の侍の時代のような礼儀正しい挨拶をして私を起こす。……他の部屋では、小さな燈明が先祖の位牌と仏様(神道の神々ではない)の前にともされていて、お勤めが始められ、先祖へお供えをする。……もうすでに老人達は庭に出て、朝日を拝んで手を拍ち、出雲のお祈りの言葉を唱えている。……

午前七時——朝食。……妻が給仕をする。私はいつも妻と一緒に少し食べるように言うが、あとで家族一同の朝食にも出なければならぬと言って、少ししか食べない。それから車夫が来る。私は洋服を着始める。初めのうちは、妻が着る物をひとつずつ順序よく渡し、ポケットにも気を配るといった日本風の習慣がいやでした。これでは愈々になってしまふと思ったのです。しかし、それに反対しようとしたら、妻の感情を害し、楽しみを損ねていることに気づきました。それで、古い習慣におとなしく従っています。

午前七時半——家中の者が見送りのために玄関に集まる。……私に差し出された妻の手にキスをする(これだけが舶来の習慣です)。それから学校へ行く。

(四、五時間空く)

車夫の呼び声と共に帰宅。……昼食。

私が済んでから他の者が食事をする。隠居が二人いますが、私が働き手だからです。一家を支える人のことをまず第一に考えなければならぬという主義によるのです。しかし、他の場合には第一ではありません。たとえば、皆が会してすわるときには、上座は年齢と親子の^{かみ}関係で決まります。そういった場合、私は四番目、妻は五番目の席です。そして、老人はそのような時は一番にもてなされます。

午後六時——入浴時間。

午後六時半から七時半——夕食

午後八時——皆が箱火鉢を囲んで「朝日新聞」を読むのを聞いたり、話をしたりする。……

夜が更けると、今度は神様の番である。昼間はふつうのお供えがしてあるだけだが、夜になると特別なお祈りが行われる。小さな燈明がともされて、私以外の皆が代わる代わるお祈りの言葉を唱えては拜む。……

皆が私が寝る時間の合図を待っている。……女中達は畳に手をつけておやすみなさいの挨拶をする。それから全く静かになる。

眠りにつくまで時々読書をする。……いつも妻は昔の習慣に従って、「失礼して先に休ませて頂きます」と言う。そんな言い方は控え目すぎると思って、一度は止めさせようと思いました。しかし、結局は、そういった習慣は美しく、また、魂の中にしみ込んでいるので、止めさせることはできませんでした。……（チェンバレン宛、一八九三年十月十一日付）

煩を厭わず引用したが、家庭生活が一定の秩序のもとで、整然と営まれていくことにハーンは満足したに違いない。とりわけ老人達を中心として行われる先祖崇拜をはじめとする家の宗教は、前述の旧日本の道徳を支えるものとしてハーンの目には映ったであろうし、親子、長幼、夫婦、そして主人と使用人との関係に基づく古くからの生活習慣も好ましいものと思えたであろう。ハーンはそういったものを認め、また、好ましいと思っているが、夫婦

間のことになると自分の中の西歐的な趣味との葛藤をいくぶん感じているようである。たとえば、上の手紙の中では、舶来の習慣は妻の手にキスをすることだけだと言っているが、朝食時に妻にも相伴させたがったり、就寝時の挨拶は他人行儀だと言って止めさせようとするなど、夫婦間にあつては個人対個人として向き合いたいという気持ち^⑩が随所に現れている。

実際、セツ夫人に対するハーンの愛情表現の仕方は、アングロサクソンのとでも言つてよいほどである。ハーンは東京に居を移してからは、ほぼ毎年のように夏休みを焼津で海水浴をして過ごしているが、東京にいる夫人に宛てたハーンの挿絵入りの手紙が何通か残っている。

小サイ可愛イママサマ。

ヨク来タト申シ度イアナタノ可愛イ手紙今朝参リマシタ。口デ言ヘナイ程喜ビマシタ。

ママサマ、少シモアブナイ事ハアリマセン。ドウゾ案ジナイデ下サイ。今年ハ一度モ夜ノ海ニ行キマセン……。私少シ淋シイ。今アナタノ顔ヲ見ナイノハ。未デスカ。見タイモノデス。……（明治三十七年八月十七日付）^⑪

文章は次男の巖が漢字を混じえて読み易くしたものであるが、ハーンは焼津での出来事を報ずる手紙を連日のようにセツに書き送っている。

『思い出の記』によれば、晩年になつて健康の衰えたハーンは、大層セツ夫人を頼りにし、夫人が外出すると、まるで赤ん坊が母親を慕うようにして夫人の帰りを待っていたという。そこには晩年特有の心細さといったものも見受けられるが、それ以上にハーンとセツとの精神的な絆の強さといったものを感じないではいられない。セツは松江以来妻としてハーンの日常生活を支えるとともに、文学上の協力者としてハーンの執筆活動を支えていた。日本語が読めないハーンに代わつて、再話の材料となる物語を見つけては読んで聞かせるセツの存在がなかったら、ハーン^⑫の再話文学がほとんど成立しなかつたであろうことは明らかである。セツは妻として、また文学上の協力者

として、二重の意味でハーンと結びついていたのである。

日本におけるハーンの結婚生活は総じて幸せなものであった。旧日本の道徳や生活習慣をいまだに守っている家族に囲まれ、その一方で、セツとの間には西欧的とも言える個と個の対峙を基盤とした夫婦関係を育んでいったハーンの暮らしぶりは、これまで検討してきた彼の思想的傾向にも符合するものであり、ハーンにとっては理想的な結婚形態であったのではないだろうか。そして、それは同時に東西融合のみごとな成功例のひとつと言っても過言ではない。

《注》

- (1) シンシナティでのハーンの行動に関しては次の書を参照した。Elizabeth Stevenson, *LAFKADIO HEARN: A Biography*, MacMillan Publishing Company, New York, 1961 (遠田勝訳「評伝ラフカディオ・ハーン」恒文社、一九八四年)。
- (2) 池橋達雄「ホルンとセツの結婚」(『山陰史談』第八号、昭和四十九年十一月)参照。
- (3) 以下、ハーンの書簡は特に注を付さず限り *The Writings of Lafcadio Hearn*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1922 に収められたエリザベス・ユスランド編集の "Life and Letters" から引用し、拙訳を施した。
- (4) *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*, edited by Elizabeth Bisland, Houghton Mifflin Company, Boston, 1910, pp. 10-11.
- (5) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 5, p.ix.
- (6) *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*, p.38.
- (7) 『小泉八雲 思ひ出の記 父「八雲」を憶う』(恒文社、一九七六年)三十二頁。
- (8) 同前、十八頁。
- (9) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 7, p.177.
- (10) *Ibid.*, p.178.
- (11) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 12, p.54.
- (12) *Ibid.*, pp.49-50.
- (13) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 6, p.137.

- (14) Ibid., p.138.
- (15) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 7, p.68.
- (16) Ibid., p. 68.
- (17) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 12, p.68.
- (18) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 10, p.4.
- (19) 『小泉八雲全集』別冊(第一書房、昭和五年)、四五六頁。